



TITLE:

人文 第17号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第17号. 人文 1977, 17: 1-32

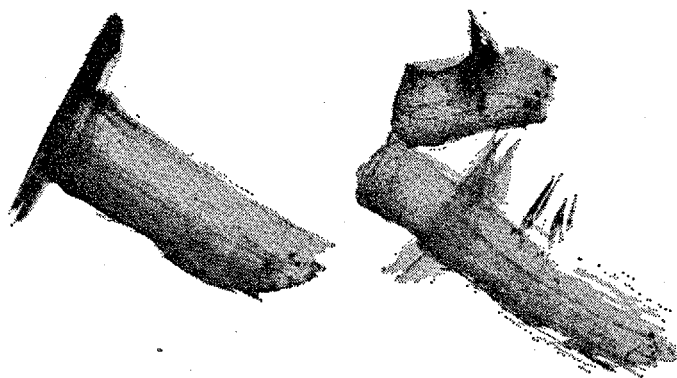
ISSUE DATE:

1977

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57143>

RIGHT:

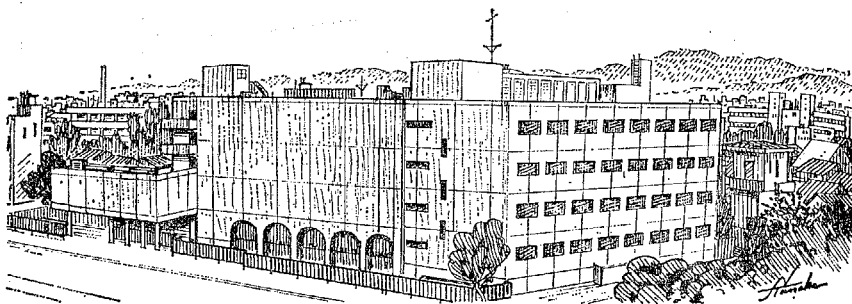


第一七号



1977

京都大学人文科学研究所



人 文 第一七号

1976年12月—1977年5月

も く じ

わたしの考え	2
共同研究と個人研究	
講演	4
退官記念講演	
日本帝國主義について	井上 清
わが中国歴史地理学	日比野文夫
書評	7
河野健二『フランス現代史』(浜田)／多田道太郎・上田篤	
『南アメリカ紀行 街角の文明者』(熊倉)／会田雄次『勝者の条件』(狭間)／井上清『昭和の五十年』(深沢)／竹内実	
『紀行 日本の中の中国』(吉屋)／会田雄次『日本人材論』(園田)／中村賢二郎『宗教改革と国家』(飯沼)／吉田邦光『京のちやあと』(多田)	
共同研究のうごき	15
現代の遺言問題(太田)／道徳的評価(穂)／人文学の方法について(上山)	
研究ノート	19
維新官寮—広沢真臣—	
研究ノート以前	佐々木 克
サンシモン主義の再検討	梅原 郁
	見市 雅俊
旅	22
北京のある一日(磯波)／西安の雪どけ(川勝)／照葉樹林文化参詣講元の記(熊倉)	
書いたもの一覽(一九七六年一月—一九七七年五月)	28
おくりもの(人文科学協会助成金(6・18) 東洋学文献センター講習会(25) お客さま(26) 人のうごき(26) 外国人研修員(27、32) 所員へのアンケート(32) カット田中重雄	

共同研究と個人研究

中村賢二郎

「人文科学研究所とは忙がしいところだ。」
こんなことをいえば、授業を本務とせず、学生も持たぬ身で、聞く耳をもってもらえるはずはないと重々承知しているから、平素はついで洩らしたこともないが、つくづくそう思うことがある。

研究所では共同研究に参加することと個人研究をもつことが義務となっている。研究を本務とし、共同研究を重視する当研究所としては、当然といえば当然の定めであるが、私の体験では、この両者はなかなかうまく両立しないのである。もっともそれには本人の能力という問題もあれば、専攻分野の問題もあり、さらに共同研究のテーマの立て方とい

う問題も大きく関わっているので、一概にいうことはできない。私の場合、最悪の諸条件が重なっていたのかも知れないが、ともかくうまく両立してきたという回想をもつことができないのである。

本人の能力の問題はいちおう棚上げしておく。専攻分野の問題では、外国研究はどうしても多くのエネルギーと時間とを喰う。たとえば日本のことを研究するのとヨーロッパのことを研究するのでは、同歩調では進まない。それに共同研究では、たとえばルソーやブルードンといったテーマを立て、共同研究参加者はその一部の研究を分担するというのと、大きな比較研究のテーマのもとで、共同研究参加者が一人でルソーやブルードンを扱うのとは、個人の負担は大きく違ってくる。われわれの間では一共同研究の期間は原則として三年ときめているから、つぎつぎとテーマを変えていかねばならず、私のいう悪条件が重なった場合には、共同研究に振り回されかねないのである。



数年前のいわゆる大学紛争の折に、われわれの間で共同研究のあり方ということが論議されたことがあった。その時、どなたであったか、研究者はそれぞれ個人研究という城をもち、そこを根城にして共同研究という野戦に出撃していくべきものだ、と発言されたことがあった。個人研究と共同研究の関係ということでは、りくつの上ではまさにその通りであるから、一同、納得顔でその問題についての論議は終ったように記憶している。

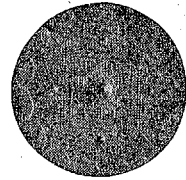
りくつの上ではまさしくその通りである。しかし現実はりくつ通りに動くとは限らず、現実と理論とのギャップは大なり小なり常に存在しているのが、それまた現実ではないだろうか。確かに私たちはそれぞれ個人研究という城をもっている。城の大きさや所有兵力は個人の能力によって違うといえるかも知れないが、理想論の上からは、城にある程度の兵力を残しつつ、共同作戦のために兵力を割いて出撃させるということになろう。しかし共同作戦の戦線が長大で多くの兵力を必要とする場合には、城に兵力を残す余裕がなくな

る。時には城を丸裸にして全兵力を出撃させることも、それはそれで悪いことではない。ただそのような状況が長期化し、しかも三年毎に転戦しなければならぬ時には、それこそ「忙がしく」て問題が生じる。下手をすれば、研究者としてのアイデンティティを喪失することにもなりかねない。

問題の現実的解決策はある程度まで明瞭である。個人から多くの兵力を求める共同研究のテーマを毎回立てることは避けること、ないしはそのような共同研究に毎回参加することとは避けることである。それに比べてすっきりしないまずい解決法としては、多くの兵力を割かねばならない共同研究にいつも加わりながら、城に兵力を残すように心がけるやり方もあげられよう。私がかろうじて共同研究と個人研究とを両立させているのは、後者の道を選んでいくからのものである。そのようなことを反省するにつけても、心の痛みを伴わない解決策のために、共同研究を一律に三年に限る現在のやり方は考え直すことはできないものだろうか、と思わぬではない。



講演



退官記念講演 (五十一年度)

三月二八日
於 楽友会館

日本帝国主義について

井 上 清

一九五四年一月、私が人文科学研究所に入れてもらってから早くも二十三年たち、この三月末をもってめでたく定年退官となりました。この間、先輩同僚の諸先生には、ずっと御迷惑のかけっぱなしであったことを恥かしく思います。とりわけ入所直後の咯血さわぎや、六八―六九年の全国的学園闘争のさいの私の言動などは、どんなにみなさまに御迷惑をかけたことでは

よう。それにもかかわらず、さきほど私を紹介して下さいた渡部徹先生をはじめみなさまから、研究面でも生活面でも、公私ともに友情あふれる御交誼、御指導をいただきましたことを、幾重にも御礼申し上げます。

私は入所以来、日本帝国主義に関する諸問題を研究の中心としてきましたので、本日の演題も「日本帝国主義について」として、現代日本の帝国主義について私見をのべます。(以下レジュメ風に論点のみあげる)

(一) 現代日本は帝国主義かどうか。(1)帝国主義は復活しつつあるがまだ復活を完了せず、日本はアメリカに主権を侵害され制限された従属国であるとの説。(2)日本は完全に自立した帝国主義国であり対米従属論はナンセンスとの説。

(二) この問題を解くには、(1)日本は国際的に被搾取・被圧迫国か、搾取・圧迫国か、(2)国内政治構造はすでに反動と暴力の支配となっているかどうか、が基準となる。

(三) 現代日本は国際的には搾取・抑圧国であることが主要な側面となり政治構造では民主主義はまったくの形骸化している。故にこれは帝国主義国である。

(四) この日本帝国主義はそれ自身の利益のためにアメリカ帝国主義に従属している。その原因は(1)七年に及ぶ米帝の占領下に日本は政治・経済・文化のすべて

の面で対米従属の構造にされた。(2)中国革命の勝利を先頭とするアジアと世界の反帝民族解放闘争の不断の発展強化による日本は帝国主義の道を歩むかぎり米帝と同盟しその核とドルの筈に頼らざるをえない。

(四) 日帝復活の諸段階。(1)一九四五―五二年四月、被占領下に、帝国主義の経済的本質である独占資本主義は弱められたが破壊はされず、帝国主義復活の基礎は残された。(2)一九五二年五月―一九六〇年六月、独占資本の戦前以上の発展強化、潜在帝国主義の時期。(3)一九六〇年新安保条約より六五年日韓条約まで、潜在帝国主義の顕在化する時期。(4)日韓条約以後、復活した日帝の新たな展開期。この四期のそれぞれの主要な矛盾は何か。

わが中国歴史地理学

日比野 丈夫

わたくしが東方文化学院京都研究所へ入っていたのは昭和十一年三月の末で、この四月一日に停年

を迎えるのだから、実に四十一年になるわけである。研究室も一度隣室から移っただけで、机の位置も壁ひとえしか隔っていない。当時の所長は狩野直喜先生で、小川琢治先生の指導を受け、森鹿三先生のもとで研究生活を始めたのである。お世話になった先輩の所員はもちろんわたくしより年上の方々ばかりで、すでに何年も前に研究所を去られた。

最初に二年間の題目として与えられたのは、「宋代物産資料の蒐集」であった。遮二無二、期間内に三千枚ばかりの原稿を作り上げて提出したが、それは戦争の末期に大阪で印刷中、空襲のため半分ほどが焼失した。いま一つは、「東亜大陸諸国疆域図」の校正印刷と、その索引の編纂である。これは研究所の開設当時から始められた事業の一つであり、中国歴史地理研究の基礎となる最高の正確な地図を作るということで、小川先生も非常な熱意をもっておられた。昭和十二年の秋に完成出版されたが、おかげでわたくしは中国の現代地名は殆んどそらんずることができるようになったのである。

昭和十四年の夏には森先生のとをうけ、外務省文化事業部の特別研究員として二カ年間の中国留学の便宜を与えられた。すでに日華事変は始まっていたが、この間にあらゆる機会をとらえて各地を旅行し、足跡

を印すること十三省に及んだ。留学後も二年ほど毎年何カ月かは中国に行くことができたのであって、その印象は今なお脳中にありありと残っている。当時はまだ古い中国のものがいくらかも保存されていたので、それがのちの文献学的研究にどれだけ役立ったかわからないと思う。

戦争直後の茫然自失期を除いては、文献学的研究の過程において、できるだけ実地調査の体験を生かして結論を出すことにつとめた。それとともに将来に備え

て、資料の蒐集整理にも尽したつもりである。この間における収穫の一つをあげれば、東南アジア各地の華僑社会を調査できたことで、わたくしとしては漢民族の発展ということに重点をおいた。それまで十分に知らなかった中国南部の状態を、逆に華僑社会からふり返って想像し、さらにそのむかし漢民族が北から南へ進出していった経過をも考えることができたのである。

おくりもの (一)

人文科学協会助成金

鎌田道隆氏

鎌田氏の『近世都市・京都』（一九七六年、角川書店）は日本近世初頭、いわゆる「幕藩体制」成立期における封建都市京都の生成・展開を実証的に究明したものである。従来の社会経済史学における近世社会の研究は農村を中心とし、都市の研究を遅滞させ、あるいは幕府権力の分析に力をそいで、近世社会における畿内の位置に必ずしも十分な検討を加えずにきたのであるが、筆者は近世初期にあってなお日本最大の都市であつ

た京都の分析をとおして、封建社会における都市の機能を明らかにしようとしている。すなわち、京都を中核とした幕府権力機構が元和・寛永期より寛文期に至る約半世紀に完成する過程をきわめて実証的に論証し、石高制下における流通結節点としての都市機能との関連を明らかにし、さらに、商品流通機構のヘゲモニーをめぐって都市住民と権力が拮抗する状況を闡明したところに、本書の価値があり、また学界に裨益するところが大である。

筆者鎌田道隆氏はほぼ十年にわたって京都市史編さん所にあつて地道な市史編纂にたずさわり、『京都の歴史』執筆とその史料整理に挺身され、また昭和五十一年度より当人文科学研究所研究班「日本における市民文化の形成」において非常勤講師をつとめ、文明開化期の農政思想についても新知見を発表され、将来を嘱望される研究者である。

書評

河野健二『フランス現代史』

(A5版、三五八頁、山川出版社)



先ず最初に、余計な減らず口を一つ。僕は書評というものを、大袈裟かもしれないが、専門家同志の血刀さげでの切り合いであると考えています。従って、以下に書くことは、その昔小学校や中学校で嫌々ながらに課せられた読書感想文に類するものだと思つて下さい。もっとも、この本を嫌々ながらに読んだのでは決してなく、広告を見て、急ぎ本屋に注文した程です。お蔭で、「七月」と「二月」と、さてどちらが先だったかしら、という程度に貧弱で断片的であつた僕の頭を整理して、新知識も仕入れることが出来ました。

この本は、「一九三〇年代に青年期を送

つた私たちの世代にとって、フランスの歴史は光り輝く何物かであり、また心あたたまる何物かであつた」という、昔の恋の大変美しい告白をもつて始められています。思えば、こういう告白が出来るということ自体、フランコ・ローグの特権ではないでしょうか。フランスという語を、仮りにドイツやアメリカで置き換えてみると、いさゝか奇異な感じは免れぬでしょうし、まして僕などが「トルコは、光り輝く何物かであつた」など書くとは、これは小沢昭一氏の文章かと思われるでしょう。とまれ、今や著者は、三十数年連れ添つた、このフランセーズの長所も短所も、極めて平静に眺める

ことのできる境地に立つておられるようです。彼女たるや、理想主義者かと思うと、ミラージュを必死になつて売りまくるといふガメツさもあり、コミュニケーションや対独レジスタンスのように、強姦されそうになると死ぬ迄抵抗する程けなげでありながら、同時に「ドゴールよりゴリス」で、やっぱり強い男が好きだという有様。可憐なのか性悪なのか、経験の浅い僕などは、ただただ翻弄されるばかりなのですが、流石に著者は、可憐は可憐、性悪は性悪とはつきり認識した上で、しかも変らぬ愛をそそぎ続けておられるように見えます。但し、ブルードンからリップの闘争に至る一筋の赤い糸に関しては、著者の情熱の恋は、まだ観照的愛情に完全に転化しきつていないようで、六八年の闘争は、「ブルードンにまでさかのぼる余裕はなく」ユーゴの労働者管理や毛沢東思想で固に合わせをしたと、叱られております。減らず口ばかりでは、申し訳ありませんから、最後に真面目な話。一九六頁に「ロワール川に沿うリヨンの市長でもあるエリオ」とありますが、勿論ロワールはローヌの誤りです。三一六頁。「ジスカール・デスタン」は、エコール

「ノルマル出の才人」。大した問題ではありませんが、彼はノルマリアンではなく、ポリテクニクの出身者です。もう一つ、二四五頁「高等裁判所はベタン元帥とラヴァル元首相を死刑にした」。良く考えて見る

と、この文章は正しいのですが、しかし、これ以後ベタンに関する記述が無いため、実際に彼が処刑されたと早合点する読者がいないとは限りません。再版の際の御一考を願う次第です。(濱田正美)

多田道太郎、上田 篤

『南アメリカ紀行 街角の文明考』

(B6版、二二六頁、サンケイ出版)

多田道太郎先生は旅行から帰つてくると、シンドカット、という。二言目には、ボクは旅行が嫌いだからとてもシンドカット、という。それをきくと、どんなに旅行がシンドクテ難行苦行の連続であつたかを強烈に印象づけられる。多田さんは遊びに外国へ行っているのじゃなくて、学問のために難行苦行もものとせず出掛けるのだと、私は思っている。

しかし我々の仲間にいわせると、あれは多田さんの人あしらいの型なのだという。我々は嬉しがり屋だから旅行から帰ろうも

のなら、どんなに旅行が楽しくて興味津々の発見の連続であつたかをトクトクとしゃべる。それは軽薄きわまりないふるまいだ、とその仲間はいう。だが私にはそう思えない。私自身旅行嫌いであるから外国へ行くシンドサは分るような気がしていたからだ。

この紀行を読んで、いささか考えが変わった。本当は、やはり多田さんは旅行好きなんじゃないかと。読んでみて実に楽しい。こんな楽しい文章をシンドイ思いで帰ってきたとたんに書けるはずはない。

南米という、ほとんど私に未知の文明を、いつもながらのズバツと思ひもつかぬ切り方で分析してみせる手腕には脱帽。オチまでついた軽妙な描写は多田・上田両先生の呼吸があつて実に楽しい。もとより実証を要求したり、体系を求めるようなものではない、ごく私的なエッセイであれば、いろいろな読み方も可能であろう。対照の斬新さもさることながら、私には私のイメージにあるお二人の姿と、紀行文中の筆者像を重ねることさらに楽しめた。文章からうかがえる筆者像は、私のイメージよりはるかに行動派でシャープな近代派である。そういえば、心なしかたつた一ヶ所挿図中に登場するお二人の写真は現実よりずいぶんスマートに撮れているようだ。脱線すれば、このお二人の登場する写真は傑作である。近代彫刻の巨大な二人の女性像のそれぞれ股の間に多田・上田両先生がはさまれている構図なのだが、本書のなかに、当の多田さんが、サンパウロの女性の股の間に本をはさんで電話する姿に吃驚した話がでてくる。下半身を無視するのが日本人の文化だとする多田さんが、自ら日本文化に抗して我身を女性の股の間に置いてみた

のだろうか。

八章、四十八に及ぶ話題はそれぞれ上田先生は建築学的な視点から「公」的なそれにそがれ、多田先生は「ぶらぶら」とか「魔よけ」とかおおよそプライベートな空間での事象に話柄をとることが多い。両者の共通する視点は、人間でいえば皮膚のよう

会田雄次『勝者の条件』

(B6版、二二頁、雷鳥社)

テレビに講演にと当代の売れっ子である会田氏が語りかけているものがなにかをこの本は教えてくれるようだ。
氏の主張は、個人的には勝者になること、民族的には日本人の誇りをとりもどすことの二つに集約される。

現在の日本は「世界のトップをきつて未来社会への道を歩んでいる」アメリカの後を追っている。しかし、麻薬禍に典型的に示されるように、たんにアメリカに追随したのでは日本も駄目だ。ゆえに腐敗現象だ

な外界と肉体の接点であり最も敏感な部分を、都市という有機体のなかで街角という部分に発見して、隠された文明の構造をみようとする眼ではないだろうか。

この本を読んで、私も南米に行きたくなった。
(熊倉功夫)

けは注意深く回避してアメリカを追おう、ということになるのだが、そのためには「いろはがるた」などに結晶させられた「民族の英知の源泉」を活用せよ、と氏は説く。

ところが、そのような「未来社会」を建設する担い手は「自分自身の努力によって生きて行こうとしている多くのまともな人々」、もっと平たくいえば「指導的な地位についている人々、これからつこうとして

いる人々」である。かれらがいらぬ劣等意識をふりはらって「勝者」すなわち「現代世界に適合的に生き、たえず新しい世界を切り拓いて行ける人間」になるとき、日本社会は健全な発展をする、というのである。

このような意味合いをもつ勝者という語は、文章によつては覇者とも、チャレンジ的人間とも呼ばれ、またバサラの精神を具備した人物としても描かれている。しかし、その攻撃のないし前進的精神で武装された実践のヴェクトルにはマイナス面をとりのぞいたアメリカ的未来社会の方向へと伸びているだけであつて、具体的な提示としてはせいぜいチャレンジ性は家庭性と相反すると指摘するにとどまっている。「現在の日本は、被害妄想者が支配する社会」といいながら、その支配にたいするチャレンジさえも説かれていないのは、指導的な人々を被害者に仕立て、それに対立する人々を「支配」する加害者にまつりあげたことの論理的帰結なのである。

勝者、チャレンジ、バサラ等々、人目をひく言葉にくわえて、しかるべき歴史知識を適当にひっぱってきて話題に色をそえてあるし、マルクス主義にたいする誹謗のわ

さびも要所できかせてある。しかし言葉はどうでも、氏の勝者とはかつてのモレーツ社員に歴史的知識の糖衣をまぶし、民族的自尊心のオペラートでつつんだ新装版にすぎない。それは高度成長を達成した日本の指導的な人々（企業）の管理職あたりがその

主内容であろう）にはもともと口ざわりの良い精神の栄養補給剤だったとしても、それにつづく危機の時代には、その効能書に反してけつして通用しないものであろう。

（狭間直樹）

井上清『昭和の五十年』

（新書版、二〇三頁、講談社）

この新書のカバーには、「そのナマナマしさゆえに、評価定まらぬ昭和史を、八人民史観」といふべきタテ糸によって、歴史のなかにひきすえた「労作」と紹介してあるが、たしかに昭和史という、けっきょくそれを叙述することが、現在の著者のありようをそのまま照射する厄介な作業をなしとげられた著者に、まず敬意を表したい。ここには、戦前には独占資本をバックにした軍部、戦後はアメリカという、のしかかるような絶対的権力によって昭和史というもの

が形成されてきたのだということを含む。分納得させるだけの叙述がある。こうした論旨の明確さに対応しているのだろうが、このような史観を八人民史観と規定することには、私は抵抗を感じる。というのは、たとえば「第二章——戦争とファシズムの十五年」で著者は、共産党の弾圧、二、二六事件を叙述していくなかで、いやおうなく戦争にひきこまれていく暗い日本をえがいておられる。これはこれで周到なのだが、しかし、ここではふつうの「人民」の状況そのものをのべることは、ほとんどない。登場するのは、軍部、政府、共産党

など、いわば時代の頂点を形成する人々ばかりである。こういう叙述スタイルは、もちろん新書という限られたスペースにおいて、一つの時代を伝えようとする場合、やむをえないことかもしれない。しかしそれは八人民史観とはいえないだろう。

私は聞いたことがある。東北の百姓で太平洋戦争のとき中国戦線にいた人が、心から軍隊生活を享受していた。というのは、不安定、過重な百姓とちがって、軍隊ではきちんと給料をくれるし、一日の「労働」もずっと楽だから、故郷の窮乏生活とくらべると天国のようなものだといふのだ。もちろんここにはいくらか誇張もあるだろう。しかし「人民」というのは、それ自体の思考・行動形態をもつのである。「第三章——占領下の日本」で、著者は「日本の降伏に日本人民は何ら積極的な役割を果たすことがなかった」といわれるが、唐突であり、しかもすぐその後で、「日本国民」の語でもって「日本人民」ととりかえていく。「人民」は、ますますアイマイモコとしてくる。著者は「史観」からいちど離れて、もっと個別の「人民」に注意してほしいと私はおもう。色川大吉氏らの試みのよ

うに。そうすれば、著者にとって新しい私たちの「人民史観」が生まれるのではな

らうか。(深沢一幸)

竹内 実

『紀行 日本のなかの中国』

(B6版、二一八頁、朝日新聞社)

「日本のあちこちにある、中国ゆかりの土地を訪ね、あらためて先入観なしに、日本と中国の「関係」を考えてみよう」(あとがき)という動機から、著者はこの紀行をはじめたという。しかし和歌山県下に徐福の墓をたずね、「始皇帝の昔より――徐福伝説のあと」を書かれた後は、著者の関心は、紀元前から一挙に近代へと、飛ぶ。そして以下、荒尾精と軍事探偵達、岡倉天心、魯迅、孫文と宮崎三兄弟、川島浪速・芳子父子、満蒙開拓青少年義勇軍と加藤完治、強制連行された中国人などが次々とあ

げられてゆく。それは、日清戦争前後から第二次大戦敗戦に至る時期に存在したさまざまな日中の道である。そしてこれらの事

例だけからも、日中の道が次第にせばまり、暗然と化してゆくさまが、具体的イメージとして浮びあがってくる。

著者は、荒尾精に軍事探偵らしからぬ中国認識の広さを見出し、宮崎滔天が示した孫文や中国革命に対する「無私の献身」(一六四頁)に想いをはせる。そして荒尾や宮崎の道が消え去ってゆく暗転の、或る象徴として川島父子をとりあげているようにもみえる。川島浪速——肅親王——川島芳子の間。そして、はじめて紹介された松本高女時代の川島芳子の手紙は、読者を暗い感慨に引き込まずにはおくまい。しかし、ともかくも加藤完治に至るまで「先入観なしに」、そこにある人々の心を読みと

ろうとしてきた著者も、中国人強制連行に關しては、もはや、心のない残酷に直面するほかはない。そしてこの歴史を示すことで、この行き止まりの道を、どう切りひらくことができるのかと読者に問いかけてくる。

こうした日本近代史にかかわる紀行文の巻頭に、紀元前の「日本に憧れた徐福」(二四頁)の話が据えられているのは、中国にとてもプラスになる日本の再生をねがわれてのことでもあろうか。しかしそのためには、戦時下日本人の「残酷さ」が果して「戦後」に解体しつくされているのか、より一般的に云えば、近代日本が蓄積してきた中国観がどう解体され、あるいは残存・変形しているかを明らかにしなければならぬ、というのが著者の基本的姿勢であると読める。「日本と中国との「過去」にふれようとしても、△過去▽とのあいだに、△戦後▽が介在しているのである」(二一〇頁)と、著者は指摘しているのである。

(古屋哲夫)

会田雄次『日本人材論』

(B6版、三二頁、講談社)

いまや、天下の御意見番となった観がある会田氏は、「愛撫された仔犬」の一人であるわたしなどから見ると「厳父」というイメージに近い。その主張は、明確であり、断定的であり、たまらなく力強い。

『人材論』は「指導者の条件」を書いた著作だが、峻厳な会田氏にかかると、明治維新の元勳たちも「小物」であり、いまをときめく東大出身の官僚などは「サートパン」に留まるべきであり、「局長でさえ行きすぎ」だとされるのである。特に「駄目」なのを拾いあつてみると、国立大学出(創造力0)・戦後世代(アメリカ式システムで育った!)・ビジネス魂をもたない者(現実を直視しない机上の人)というところだろうか。

一方、指導者として大きな可能性をもつのは「須佐之男命」「大國主命」「空海」「藤原純友」「平将門」「楠正成」「秀吉」など

の「アウトサイダー」たちであり、かれらは、乱世において「自由自在な創造」をおこなったとされるのである。近代社会は「崩壊過程」にあり、未来社会はさまざまな価値が錯綜する乱世だ。したがって、未来社会の指導者は、既成の価値の守護者では「駄目」で、価値の創造者でなければならぬ。会田氏はこのように主張したいようだ。会田文明史観にこれ以上、触れるわけにはいかない。そして、指導者論についても。ほとんど、なにも、書かれていないからだ。

「正直言つて、所詮日本は没落するだろうという諦観から脱し得ない。」(二三頁)とする会田氏が、諦めず熱心に説いているのは、指導者論に名をかりた被指導者論、あるいは日本文化論である。どのような「人物」(指導者ではない)が「駄目」なタイプかということに『人材論』の大半

は費されているのであり、この本の魅力は、痛快さも、また、ここにある。会田氏が、たんなる政治評論家に墮さず、厳父でありうるのも、このためである。

われわれは、激しく、断固として叱ってもらいたいのだ。次のように。「肉体とかセックスとか自然から与えられたものを軽蔑する人間も駄目」「自分自身を軽蔑するタイプも駄目」「客観的に自分を突き放せる人間でなくては駄目」そして、そつと、自分はこのタイプではないと思うのだ。演出された厳父なのか、本気のそれなのかは、知らないが、戦後生まれの「駄目」なわたしにとって、会田氏の「一文」は厳父そのものの壮快さがあつたことを告白しておく。その、頑固さも、理不尽さをも含めて。

最後に、日本文化の権威であられる会田氏に、一つ解いてもらいたい問題がある。「人材」という言葉はどこまでいっても被指導者なのではないかということ。つまり、日本人は、日常的意識の中で、よりよい被指導者になろうという志向性のみ強く、指導者になろうとする気持が、ほとんどないのではないか。そして、にもかかわらず、

現実には、指導する者がいないのだから、被指導者の極限は指導者というパラドックスが、日本文化の「性格」と考えたらいい

のか、もっと通文化的な傾向であるのか。この問題は狼型理論では答えられないと思うのだが、如何！（園田英弘）

中村賢二郎『宗教改革と国家』

（A5版 二六一頁、ミネルヴァ書房）

数年前の人文の夏期講座で、中村さんは、ルターの数ある宗教的パンフレットのなかでも最も代表的な『キリスト者の自由』について講演されたことがあった。それは、ルターをとりまく政治状況の分析として、まことにいきとどいたものであった。（私はとても感服して、私の所属する北白川教会の集會に、わざわざおいでをいただいて、そのお話をしていたいた。）だが、それにもかかわらず、そのときの私には、靴をへだてて、かゆきをかくといった一種のもどかしきをも、また、感じないわけにはいかなかった。

講演の（北白川教会ではなしに、夏期講座の）後で、私は、中村さんに、私の不満

を率直にぶつけてみた。「ルターが現実の

政治権力と社会を肯定し、政治的・社会的にほとんど変化をもたらさなかったとしても、それはルターが現実と妥協したためではないのではないか。もし、そうだとしたら、彼が命がけで、ローマ法皇から破門をも恐れないで、自己の信仰を守りとおした行為と整合しないではないか」。しかし、そのとき、中村さんから、明確な返事をいただくことはできなかった。「僕は、政治の問題をあつかっているのであって、宗教の問題をあつかっているのではない」と。

今度の本では、第一部に政治の問題を、第二部に宗教の問題をあつかっておられる。私の不満は、一応、解消しなければな

らないはずであるが、やはり、依然として、不満は残った。それは、第一部と第二部とが、内面的に結びつけられていないように、思われたからである。

もちろん、私は、キリスト者でなければ、ドイツ宗教改革はわからない、などという暴言をはくつもりは毛頭ない。ただ、私のいいたいのは、宗教改革を分析するのなら、もう少し宗教改革者の信仰の内面にまで入りこむ必要があるのではないかということなのである。

第一部においては、宗教改革運動が、結果的にはドイツの諸侯、領邦国家によって利用され、その権力の強化と帝国の解体をいっそうおし進めたことが、とくに修道院財産の没収と領邦教会制の確立という二面からの確に分析されている。イギリスとちがって、ドイツにおける修道院解散も国教制度の確立も、日本では従来ほとんど未開の分野であり、私は教えられることがひじょうに多かった。

また、第二部においても、宗教改革期に多数あらわれた急進的宗教改革派、とくに再洗礼派の思想が分析されている。私のように、せいぜい、トーマス・ミュンツァー

ぐらしいか知らないものにとつては、フリー派、フッター派、ホフマン派、メノー派など、全くはじめて聞く名前であつて、これまた、たいへん教えられるところが多かった。しかし、なぜ、これらの人々が、彈圧と殉教の死をも恐れず再洗礼を主張したのか、そもそも再洗礼とはいかなる信仰的理由に基づくのか、あるいは、また、なぜ再洗礼ということが、領主や支配階級にとつて、ただたんに信仰的のみならず政治的にも徹底的に彈圧しなければならぬものであつたのか、ということが、いっこうにわからなかつた。

キリスト教における最も大切な戒めは、イエス自身がいうように、神を愛し、隣人を愛することである。神を愛するとは神に一切をまかせることであり、隣人を愛するとはあらゆる束縛から隣人を解放することである。その束縛とは、結局、外からの支配権力のエゴイズムと、内なるその人自身のエゴイズムによる。これらの束縛から解放されないかぎり、眞の自由はない。ルターの誤謬は、内なる隣人自身のエゴイズムのみに注目し、外なる支配権力のエゴイズムに無知だつたところにある、再

洗礼派はこの外なるエゴイズムにまで目を向けようとしたからこそ、支配権力の彈圧

を招いたのではないか、と私には思われる。

(飯沼二郎)

吉田光邦『京のちやあと』

(B5版、二八四頁、朝日新聞社)

著者のいう「都市民俗学」というのは、これからの大事な学問である。「京のちやあと」は、その都市民俗学の皮切りともいうべき名著になうだろう。

著者が事物を記録した諸文献に通じるところ、私などはただただ羨望し、遠望し、その一端を望見するのみ、という想いを禁じえない。古い菓子屋さんに、江戸末からの各種各様の菓子をこくめいにスケッチしたものが残されていたという。スケッチして残した人も人だし、それを探しあてて頭のないなかでスケッチしてまわる人も人である。

都市民俗学の対象には、生きた文献——人間、事物、現象——が多い。そのどれをどう記録にとどめるか。どういう角度から何を切りとるか。それが問題である。

いずれは何かの法則みたいなものがでてくるだろうが、先驅的段階ではすぐれたカンが働かねばなるまい。カンをさらにカンで批評するのはいかなるものかと思うが、たとえば著者が西部講堂の、テルアビブの夏の青屋根に注目しているあたり、素朴にササガと叫んだのである。これが都市民俗学の対象というものであろう。

カンと経験との集めたものをどう意味づけてゆくか。この点でも「京のちやあと」はチャートという看板を偽っていない。たとえば、家元と天皇とをひっくるめて「虚構の人生の代行者」と言いあてているあたり、とてもおもしろい説である。代行というものの意味が、一挙にここに来て、照明をあびるようである。

(多田道太郎)

現代の遺言問題

太田 武 男

われわれ「家族問題研究班」は、夫婦・親子・相続をめぐる諸問題に関する理論的・実証的・立法論的研究を、その主たる目的ないし内容として、昭和四一年四月に発足し、第一期は、夫婦問題なかでも離婚問題を、第二期は、親子問題なかでも老親扶養等の問題を中心に研究を進めてきた。しかしてまた、その間、一方では、「産業構造の変革に伴なう家族関係の変遷」をテーマに「都市と山村における家族の生活」についての実証的研究のみならず、家族問題ないし家族法に関する判例や文献の蒐集・整理を試みてきた。そしていま、第三期の相続問題に関する研究を遺言をめぐる諸問題を中心に進めている。

いうまでもなく、遺言の慣行は、わが国には古くから存在し、現在にも及んでいるが、戦後とくに最近一〇年

間における遺言（自筆証書遺言）件数の増加は実にめざましく、遺言ブームとさえいわれている。しかしながら、遺言に関する純学問的な研究は、最近でも、未だ皆無に近い状態であるのみならず、その法的基礎は、明治民法の規定が、そのまま今日に及んでいる実情である。ところが、社会の進展に伴ない、明治民法制定当時においては予期さえしていなかったタイプ打ち遺言や録音テープによる遺言形態等も登場するに至り、それらの遺言の効力が論じられるに至っている。第三期のテーマとして、遺言問題を取り上げることにしたのは、そのためである。

そして、われわれは、ここ数年間の研究の結果、(一)まず、総論的な問題としては、遺言の役割ないし機能それとの関連における遺言制度ないし遺言法の位置づけの問題、(二)つぎに、各論的な問題としては、①法定遺言事項の範囲の問題、②方式の緩和ないし簡易化の問題（証人・立会人の資格・範囲・人数の問題を含む）、③遺言書検認制度の問題（遺言確認制度との関係ないしその一元化の問題を含む）、④遺言書の公的保管制度創設の問題、⑤遺言執行制度の問題（執行についての家裁の権限強化の適否の問題を含む）、⑥涉外遺言の準拠法の問題、⑦遺言者の意思とその解釈とくにその解釈基準の問題、⑧遺言者の指示とその効力（いわゆる二代にわたる遺言の効力の問題）、⑨遺留分

を超える相統分の指定とその効力の問題、⑩遺言内容と異なる遺産分割の調停もしくは審判の効力の問題等々、立法論的にも解釈論的にも解決を要する諸問題に遭遇した。したがって今後は、右の諸問題を中心に、比較法論的な考察をも加えて、検討を深め、近くその成果を『現代の遺言問題』と題する一書にまとめて報告したいと考えている。われわれの共同研究が、わが国が現在直面している遺言をめぐる諸問題の解決に役立ち、改正遺言法の立案に多少なりともお役に立てば望外の幸である。

道徳的評価

—五四運動研究班—

森 時彦

先日、『毛沢東伝』の著者として有名なジェローム・チェン教授が、わが班のために「近代中国と袁世凱」と題する講演をされた。講演内容と質疑応答は、近刊の『アジア・クォーターリー』に掲載される予定であるので、

詳細はそちらに譲るが、歴史評価の問題をめぐってかわされた討論の一端だけ、まず紹介しておきたい。

袁世凱というと、日本では従来、辛亥革命の成果を無にし、国権をかすめとった「窃国大盜」、自己の権力を維持するために、国益を帝国主義に売りわたした「売国賊」、しかも権謀術策にたけた軍閥の頭目、要するに近代中国におけるマイナス価値を代表する人物として理解されてきた。ところが、陳氏はこのような「道徳的評価」には何の意味もないという前提にたち、民族主義と国家統一という二つの柱をたてて、袁世凱の思想を「評価ぬき」に追求した。辛亥以前には、伝統文化の保存を体(体用の体)とする民族主義が課題であり、袁世凱は軍隊の整備を富強自立の捷徑と考え、それによって体を守ろうとした。辛亥革命に際しては、袁の関心は革命にとりもなう分裂をさけ、国内の統一を保つところであり、帝制運動もその一環としてあったとする。

たしかに、このような袁世凱像は、非常に新鮮で、われわれは陳氏の論に、伝統的な中国的歴史観とヨーロッパ流の歴史主義が結合した歴史学のあり方を見る思いがした。また、話のはしばしに、機知にとんだエピソードもありこまれ、いかにもサロンのな雰囲気の中で、叙述を大切にそだててきたヨーロッパの歴史家という感じがした。

しかし、反帝反封建を自明の前提として近代中国を研究してきたわれわれにとって、陳氏の論には納得できない点が多い。われわれの研究対象たる五四運動からして、反帝反封建の流れの中でとらえないかぎり、つまりある「道徳的評価」にたたないかぎり、数千の学生が騒ぎをおこし、それに無知な民衆が雷同した事件でしかないことになる。われわれは、来年にも陳氏を客員教授にお招きしようと計画をたてているが、もし実現すれば、わが班の基盤にもかかわる問題を十二分に討論できるものと期待しているところである。

ところで、わが班は来年三月を以て一応の区切りをつけることになる。夏休みも終りに近づき、たまりにたまった宿題に追われるような思いで、論文集の作成を準備している現状である。

人文学の方法について

上山 春 平

「人文学の方法」というでっかいテーマをにかけてメン

バー四名というささやかなチームで発足してから、いつのまにか一年あまりになってしまった。メンバーの数をしばったのは、まず問題の焦点を明らかにするための準備作業をやっておこうという心づもりからであった。さし当りは、哲学のジャンルに属するものばかりで、この作業に当たっているが、メンバーは、いずれも、哲学畑のものとしては、哲学以外の科学のジャンルと接触する機会をかなり豊富に持ちあわせており、四人のうち二人までが、大学で理科系のコースを経ているといった事情もある。自然科学をふくめた科学全般を視野におさめながら、そのなかで人文学の方法の特質や問題点を明らかにする、といった進め方をしている。

哲学という学問は、むかしは「万学の女王」などともてはやされ、その名にふさわしい時代もたしかにあったのだが、十七、八世紀以降の近代科学の急速な発展の結果、斜陽の一途をたどり、学問といえは近代自然科学に範をとる科学的方法にしたがうものでなければならぬという風潮が一般的となるにつれて、科学以前のもの、したがって学問以前のものといった見方もつよめられてきた。同様なことは、古来、学問の中心的位置をしめてきた古典学についても言えるはずだし、古典学を中核とする形で展開されてきた文学一般についても言えるのであるまいか。

日本の旧制の大学では、文学部というのが、哲学と文学と歴史という三つの学科から構成されるならわしになつており、この三学科が文科系の学問ジャンルの大まかな分類原理みたいなものとして通用している。私たちは、こうした慣行的分類を一つの与件として仮に受け入れたかつこうをとりながら、その総称として「人文学」いうやややかえめな名称を与えておいて、その内容に検討を加えてみようとしているわけだ。

哲・史・文の三学科のうち、哲学と文学は、いまでは哲学史・文学史みたいなものになつていて、思想史に還元される方向をつよめつつあるので、人文学の方法の検討に当って、歴史学の方法の検討がかなり重い意味をもつてくるように思われる。そうした見当から、私たちは、まず、歴史方法論の検討から出発したのだが、これと併行して、人文学の位置づけを明らかにするために、学問分類論を系譜的に吟味してきた。

おくりもの (一)

人文科学協会助成金

上田 正氏

上田正氏は、戦前の小学校教師に始まる長い、しかも煩忙な教育家の経歴を通じ、乏しい時間の余裕を傾注して、中国音韻史の研究並びに資料の収集に当って来られた。

出版公刊されるという希望はほとんど皆無であるような、地道な作業の積重ねと、その基礎の上に立つ中庸應當な発言とは、漸次学界の注目するところとなり、うち『切韻残卷諸本補正』は、東京・東洋学文献センター叢刊の一に収められたが、氏の着実な資料収集作業の成果を、研究

の指針と仰ぐ若い研究者たちは、ついで氏の『切韻諸本反切綜覧』をも、その人たちの研究集団である均社草刊第一種として公刊、学界共通の裨益とするに至った。

以上の二著がこれまでの氏の主著であるが、氏はなお倦むことなく、日本残存古佚資料の中から、切韻原本の断片を網羅編集し、これを公刊しようという大きな事業に従つておられる。

人文科学研究協会の助成金が、このような篤学真摯な、民間の学者に贈られることは、同じように地味な、必ずしも思まれざる研究に従事する者たちにとって、大きな励ましとなるであろう、と推薦文には述べられているが、比較的高齢の受贈者である氏にしてなお、その仕事が終わりを告げたことへの表彰でなく、実に、いま見たような次の新しい仕事への励ましとして、それを受け取られたのであるとは、一層大きな意味をもつものであると思われる。

維新官僚―広沢真臣―

佐々木 克

明治初年の政治過程における、一部政治家群像の卓抜した政治指導力は、その結果のもたらした正負の面はともかくとして、大きく評価せざるをえない。彼らは国政の決定にあずかる政治家であると同時に、省庁実務を担当する官僚でもあった。

この、明治初年の政治家官僚を維新官僚と呼ぶが、狭義に規定すれば、維新官僚とは、鳥羽・伏見戦争から廢藩置県に至る政府、すなわち維新政権の政治的主体である。維新官僚は、藩士身分のままで、藩とは相対的に独自の機能を持ち、かつ藩権力を侵蝕する運動論を基調とする維新政権の官僚であるという重層身分であった。それ故に、出身藩との絆を断ちきれないが、しかし常に藩からの自立を志向していた。

彼らが急務とする課題は、政府の強化であり、その目的遂行の過程で、省務の体験を通して多様な可能性を模索しつつ、

自己の領域を確かめていった。そして全体として政治家として強い指導力を備え、同時に官僚機構と官僚思想を形成していった。維新官僚は、いずれも幕末の政治変革に、何らかの形で主体的にかかわった、主として薩摩・長州・土佐・肥前藩出身者である。しかし必ずしも志士の運動の体験者というわけではない。

私は維新官僚の基本的特徴を以上のごとく考えており、その典型として長州藩出身の参議広沢真臣に注目している。広沢には志士の活動の経験はなく、藩官僚出身である。維新政府では、参予・京都府御用掛・民部官副知事・民部大輔・参議等を歴任、この間長州藩参政上座御改正詮議掛となつて、藩政改革を指導している。

彼は大体において民部―内政畑の官僚であったが、版籍奉還・民部大蔵両省分離問題等においてきわめて政治的な重要な役割を演じた。またこの間に、「府県施政順序」「府県奉職規則」「新県仮規則」「民部官規則」等の官制及び施政綱領の他、郡県・封建に関する意見書等数多くの政治意見書を書いた。

彼の残した記録と行動を総合すると、広沢の政治主張は、政治の強化という一点に収斂され、漸進主義を基本的立場とする実務的官僚であるとともに、現実的な権力思考の持主であったと思われる。彼の立場は理想主義的な木戸孝允の対極にあり、大久保利通は広沢と木戸の中間に位置づけられよう。

広沢の研究は現在の所皆無に近い。広沢に関する資料を集めはじめて数年、ようやく広沢像が、その輪廓を明らかにしつつあるように覚える。西郷・板垣・木戸が、次第に明治政権の主

流から離れていったのを見る時、彼らが共通して省務の未経験者であった点が興味ぶかく、この事からも明治政治史における、維新官僚の位置づけが重要な問題となってくるのではないだろうか。

研究ノート以前

梅原 郁

絵とか陶磁とか、いわゆる美術史の対象とするモノは、現物が見られなければ話にならない。いかに優れた写真や図版を揃えても実物から得られるナマの感覚がすべてに優先する。日本国内にあるものとはともかく、不幸にも、中国本土、台湾、そして欧米と旧中国のすぐれた絵画や陶磁が分散所蔵され、そこに日本人特有の狭量な生マジメさにもとづく政治や思想の問題が入りこむから、モノをみることもままならず、さなきだに六ヶ敷い中国美術史の研究がますます困難になる。

旧中国に関する研究の多くの分野では、日本の学界は今日な

お一定の高水準を維持しているといつてよからう。しかし、美術、とりわけ絵画史に関しては、すでにアメリカにかなり水をあけられつつある。まる一年の間、主として十九世紀の末以降、中国から欧米に流出した、少くない量の絵画や陶磁器あるいは仏像などのうち、宋代の品々をできる限り目撃し、同時にアメリカの学界の一端をかいまみる事ができたことは、望外の喜びであった。

ボストン、フリア、クリーブランド、カンサスシティなど逸品を所蔵する大美術館、プリンストン、イエール、カリフォルニアなど、働き盛りの研究者を擁し、いまの人文などからみると垂涎の写真資料や図書を蒐集し、かつ多くの学生を中国、日本に送って実物をみさせ、訓練している状況を、いまのところ指をくわえて眺めているというのが偽わらざる姿であろうか。

我々の戦後の我が国の中国史学においては、社会経済史、就中土地所有制や農民運動などの研究がクローズアップされ、いまもって若い学徒の間では、それが研究の本流の如く錯覚されている。私もそうした問題を一応はいじってみたものの、それこそ日本などとは桁の外れた広大、深淵なスケールを持つ中国文明の流れには、とても社会経済史の一本柱ぐらいでは棹さすことはできない。

今は薄らぎつつあるが、京都の中国学の一つの特色に、原典の精読と多読を通じて、自らそのものの本質にじかに触れるという方向があった。美術史の分野でアメリカがリードしたといっても、彼らの多くは、まだ絵や陶磁の奥にある文化、ところを十二分に把握しているとは思えない。幸い、何年かをかけて

アメリカに所蔵されている絵画の写真が東洋文化の鈴木敬氏を中心に撮られ、その目録もでた。私のやっている宋という限られた時代だけでもまだまだ残っている問題は多い。

サンシモン主義の再検討

見市雅俊

オウエン主義研究の経験が私にサンシモン主義研究における支配的な見方、すなわち経済優先の見方にたいして疑問の眼を向けさせたと思う。

今日のオウエン主義研究はJ・F・C・ハリソンの千年王国主義説を抜きにしては語れない。ハリソンは、マルクス主義ないしイギリス的社会主義の観点からオウエン主義を論じるそれまでの支配的な研究方法を否定して、それを時代の context のなかでとらえ直し、その結果、オウエンの運動を千年王国主義の運動のなかに位置づけるという新しい視野を切り開いたのであった。

私はJ・E・スミスという元々は「オーソドックス」な千年王国主義者であり、そしてのちにオウエン主義とサンシモン主義の両方を撰取して独自の社会主義理論を構築した人物の研究を通してハリソン説の正しさを示そうとした。同時にその過程で私はサンシモン主義もまたあくまで時代の context のなかでみる必要を痛感した。

以上のような観点からサンシモン主義を概観してみても、従来の研究では軽視されていたその政治的、宗教的な側面（両者は一体化されている）にこそ実は同派の思想的な枠組の基礎、そして運動のダイナミズムがあるように思われた。そればかりではなく、そこでは今日の社会主義世界がかえこんだ矛盾、とりわけ個人崇拜、全体主義的な社会統制が、のちの社会主義理論ではみられぬ位に積極的なかたちで提起され、正当化されていたのであった。

以上の事柄は理論的にも実践的にも証明しうるものだが、当面、私はサンシモン主義の運動の側面に重点をおこうと思っている。その手始めとして、千年王国主義、女性メシア来臨説、東洋と西洋の結晶、スエズ運河の建設、フランスの伝統的東方政策、メフメットIIアリ下のエジプトの統一と近代化等々のものが複雑に絡み合った一八三三―六六年のアンファンタンのサンシモン主義者によるエジプト伝道事業の顛末について研究する予定である。

旅

北京のある一日

礪波 護

第二次中国研究者訪中参観団に加わり、所内の曾布川、森、夫馬、秋山の諸君らと、昨年末から一月中旬にかけての厳寒の二十三日間、上海・蘇州・南京・西安・延安・北京の各地を訪れた。この旅の特にある一日の行程を取出して私にとっては初めての中国旅行全体を象徴させようとすると、西安からバスでかつての渭城のあたりをよぎり乾陵を訪れた感激の日よりも、北京での一月十四日が最も適当ということになりそうだ。

宿舍の新僑飯店での朝食後、九時に中国対外友好協会に到着、張香山中日友好協会副会長らの出迎えをうけ、まずは揃っての記念撮影（先方による記念写真も旅行中を通じこの時だけである）。続いて張香山氏の延々三時間に及ぶ講話を拝聴。張氏は、一九七七年の年頭に当っての四大任務、とりわけ四人組反党集団への批判を展開された。この会見の様子は、翌十五日の人民日報に報道された。

ホテルでの昼食後、寸暇を惜しみ、タクシーに分乗して琉璃廠の中国書店へ古書探索に行く。午後の参観先たる歴史博物館では解説図録が売られていて、新しい展観体制が確立したことを知ることができた。日本語版も列んでいた。逸品ぞろいの膨大な陳列

品、それも殆んどが複製品ではなく真的とあつては、半日そこらの

参観では見尽せるものではなかった。ホテルに帰り夕食をとっている時、今夜、科学院考古研究所所長の夏鼐先生ご自身がホテルまでお越し下さるという連絡があったので、

予め考古研究所への参観希望をだしてい永田英正・曾布川寛両氏ともども、先方の都合で文学研究所の方々との交流が実現しなかった井波律子さんを誘って出席した。

夏鼐先生はわれわれの質問に応じ最新の学界状況を二時間半に亘って懇切に教えて下さった。かの居延において、A32地点たる金関で五・六千点、A8地点たる破城子で一万点の漢簡が新たに発見されたことや、漢の長安城跡で大武器庫が発掘されたことな



夏鼐先生を囲んで

ど、今なお正規の報告の發表されていない情報はわれわれを驚倒させずにはおかなかった。また人文科学研究所内外の諸先生との交友をエピソードを交えて懐しがっておられた。お別れを前にして一緒に写真に収まって戴いたが、時計の針はすでに九時をまわっていた。この写真を見返すたびに、けれんのない碩学の風貌が眼前に彷彿とする。

午前九時の団員一同の写真撮影とそれに続く政治色豊かな張香山氏の講話が始まった北京の一日は、かくて学殖あふれる夏鼐先生の飾り気のないお話と先生を囲む小人数の午後九時の記念写真で終りを告げたのである。

西安の雪どけ

川 勝 義 雄

三月十八日から二週間、日中学術懇談会によって組織された大教学員訪華団の一員に加えられ、上海・西安・延安・北京など、はじめて中国本土を見ることができたのは、まことに幸いであった。その間、いわゆる四人組の流した害毒について話を聞かない日はほとんどなかったが、もっとも実感に迫る説明を聞くことができたのは、西安の西北大学における懇談会の折であった。以下はその説明の要約である。

毛首席は知育と徳育（＝社会主義教育）との両立を説き、老・壮・青の三結合を指示したにもかかわらず、四人組は徳育を尊重

し、知育を徳育に対立するものとして軽視した。いな、むしろ否定した。かれらは教師の専門研究を禁止し、専門家としての教師による授業の必要性を認めず、教師なしに学生が自習することを奨励した。かれらはもっぱら青年ばかり煽動して三結合を崩し、教師と学生の関係を破壊したために、研究水準は低下し、教育活動に混乱が生じた。いまや、その弊害を除去すべく、「尊師愛生」——師を尊び学生を愛する——のスローガンのもとで、教師も学生もともどもに規律を守りつつ、知育と徳育の調和と、三結合の回復に努力している、というのであった。

そのように説明する西北大学の先生の態度には、教師としての、また専門家としての存在理由を否定されていた昨年末までの状況に対する憤懣と、そのような状況をもたらした四人組に対する憎悪の感情が、真率ににじみ出ていた。それは実感をもって私の胸にも伝わってきた。かつての大学紛争の時期における学園の荒廃を思いおこしたからである。

中国では、こうして「造反有理」のゆきすぎが、「尊師愛生」という古くて新しい標語に置きかえられている。それもいずれは不断革命の過程における一段階ということになるだろうが、少くとも今、大学の先生がたは心からホッとしているように思われる。

そういえば、三月二十三日午前、鄭州から西安に飛ぶ機上から、嵩山や華山はどこかと目を皿のようにして見おろしていたとき、山々は一面に皚々たる白雪におおわれていた。西安の空港に降りたときにも、樹々にはなお春の残雪が見うけられた。しかし、春は確かな足どりで西安に来ていた。アンズやスモモはすで

に花ざかりであった。古都西安にふさわしく、清朝の遺老を思わせるような白い鬚の老人が、街頭で日なたぼっこをしながら、幼い孫たちをあやしていた。

照葉樹林文化参詣講元の記

熊倉 功夫

いつからこんな話になったのか、いまとなつてはすこぶる曖昧なのだが、是非シツキムの調査をしたい、という守屋毅氏と、一度アッサム・ダージリンを見たいという私とが話をしているうちに「照葉樹林文化参詣講」ともいふべき集団ができあがった。のみならず、ことのなりゆきで、守屋氏と私がその講元をひきうけることになった。出発までの紆余曲折は略す。ともかく、総勢十四名の、なんとかごまかして飛行機の割引き運賃で行ける団体をつくつて、伊丹空港を出発したときは、正直いって、よくやったものだと思つた。

あるいは朝日新聞紙上にのつた同行の高橋徹記者のレポートや、藤岡喜愛氏の文章をご覧になった方もおられよう。概略はそれらに尽きているが、実際の旅行はまことに珍道中。しかしそのなかで得た教訓は、およそ一般化し得るとは思えぬが私にとつて貴重である。その一。馴れぬ土地に行くには何とかパックの添乗員付き旅行に限ること。添乗員の振る旗のもとにホテル三食付きで歩くことの気楽さ。これは何にかえがたい。もともと北部イ



アッサム紅茶の試飲

ンドのような厳戒体制のところでは行動の自由はないのだから、はじめにきつちり計画と要求を出しておけば、あとは旅行社まで行くほかはない。

教訓の二。団体旅行は女性がいるのはよいことだ。旅行中最大のピンチはシツキムのヴィザがダージリンから出発予定日の夕闇せまるころにおりたときだった。夜道五時間のジープ行を強行するか、翌朝に出発を延ばすか決めかねたとき、本能的に安全を選んだのは女性であった。少々買物のおつきあいをさせられても、女性が加わった方がよい。教訓の三。講元をするなら、自分の希望をスケジュールにかなり反映させられるのは役得といふべきだが、それなら一番みたくところを旅行の前半、できれば最初に予定すること。私のような体力のない人間には、旅行が十日を過ぎるともはや感受性は加速度的に低下する。ねばりがなくなる。一

カ所に滞留したくなる。団体旅行だから、いいかえれば安くきているのだからそんなわがままはいえない。だから元氣なうちに見たいものを見てしまおう、というのだ。これは今回成功した。

最初の訪問地アッサムは一番みたいところでもあり、収獲も大きかった。この写真はアッサムにあるインド最大の茶業試験場ト

クライで、私が滑稽なほど真面目な顔で紅茶の試飲をしているところ。これもまた同行の名カメラマン村井康彦氏が撮影して下さったものである。次はまた同じ手で雲南の茶の参観を狙っているのだが、うまくゆくかどうか。

東洋学文献センター

昭和五十一年度

漢籍担当者講習会

慣例となった文部省学術局情報図書館課と本所附属東洋学文献センター共催の、全国ライブラリアンを対象とした講習会は、五十一年五月三十一日から六日間にわたって行われた。受講者は三十名。なお実習指導員には、講師のほかに、本所の秋山元秀、池田秀三、夫馬進、東京大学東洋文化研究所の初見昇、沢谷昭次、陳明新、中里富三男の諸氏が当った。また第四日には南禅寺を見学し、宗務総長桜井景雄氏をわずらわして貴重な宋元板の經典類を拝観した。

第一日

漢籍整理について

カードの作り方「A」

第二日

経部書

史部書

第三日

子部書

集部書・叢書

第四日

カードの作り方「B」

南禅寺見学

第五日

カードの作り方「C」

中国の書物

第六日

討議及び情報交換

尾崎雄二郎

小国 健一

吉川 忠夫

礪波 護

勝村 哲也

荒井 健

梅村智恵子

解説 桜井 景雄

今井 清

古川幸次郎

座長 川勝 義雄

お客さま

十二月一日(水)

カナダ、ブリテイツシュ・コロンビア大学教授
リチャード・ピアソン氏

意見交換

十二月二〇日(月)

オーストラリア、ラ・トウロップ大学講師
北大路弘信氏

北大路百合子氏

デイスカッション「都市居住、アポリジ

ニーズの家族構造」について

十二月二〇日(月)

ソ連科学アカデミー極東研究所

デリューション氏

四月一日(月)

オランダ、ライデン大学客員教授

ファン・バット氏

日本学術振興会の招きで来日され、研究所本館会議室で「東欧の農奴制と資本主義」について講演された。来会者二十五名。

五月一日(日)

フランス、パリ第一大学教授

アルベール・ソプール氏

在パリ日本館の肝入りで来日され、研究所本館会議室で「革命と平等主義——十八世紀と十九世紀」と題して講演された。来会者約二十名。

五月二十七日(金)

フランス、ポール第三大学教授

ジョルジュ・デュブー氏

講演「フランスに於ける政治的伝統——両極流から中央派結集か——」

人のうごき

○井上清(日本部)・日比野丈夫(東方面)

両教授は停年退官。

○吉田光邦(日本部) 助教授は教授に昇任。

○狭間直樹氏を助教授(東方面)に採用。

○田中峰雄氏を助手(西洋部)に採用。

○三浦国雄助手(東方面)は東北大学助教授(教養部)に転出。

(以上五二年四月一日付)

○佐々木克氏を助教授(日本部)に採用。

(五月一日付)

○深沢一幸氏を助手(東方面)に採用。

(五月一六日付)

○熊倉功夫助手(日本部)は講師に昇任。

(六月一六日付)

○梅原郁助教授は昨年一月よりアメリカ各地およびヨーロッパに於ける宋代史研究ならびに史料蒐集をおえて十二月末帰国。

○井上清教授は昨年十二月二十四日伊丹発、中国科学院で、日本近・現代史に関する講義と資料蒐集をおえ、一月二五日帰国。

○第二次青年中国研究者訪中団として瀾波護助教授・秋山元秀・曾布川寛・森時彦・夫馬進助手は昨十二月二七日伊丹発、

西北・北京兩大学、太平天国・陝西省博物館、北京歴史博物館、民族学院、科学院、革命遺跡等を視察及び資料を蒐集し、

一月一八日帰国。

○川勝義雄教授は、三月一八日伊丹発、復

旦・西北・北京大学等で研究機関等の視察を終え、四月一日帰国。

○林巳奈夫教授は、四月一〇日羽田発。大

英・ギメ・リートベルク博物館、スエー

デンの遠東美術館で、中国漢時代考古遺物の研究を行ない、七月一〇日帰国予定。

○熊倉功夫助手は、四月五日伊丹発、カル

カタ市内、ダージリン市内、カトマン

ス等で茶業及び飲茶風俗調査を終え、同月二日帰国。

○松井健助手は、五月二〇日伊丹発。マニラ・パラウィ島・アバリ周辺等で社会人類学的調査を行ない、八月九日帰国予定。

外国人研修員

Jerry K. Dusenbury

中江兆民の研究

指導教官 飛鳥井助教授

期間 五一年七月～五二年三月

Jerry P. Dennerline ポモナ大学助教授

明清時代政治社会史研究

指導教官 小野譚師

期間 五一年七月～五二年六月

Constance Johnson ペンシルバニア大学

院生

宋代の任官制度について

指導教官 磯波助教

期間 五一年八月～五二年十二月

Robert P. Hynes ペンシルバニア大学

院生

宋代の地方貴族と社会的変動について

指導教官 磯波助教

期間 五一年一月～五二年一〇月

Laurence Kominz ロンビア大学院生

戦国時代の芸能 指導教官 林屋教授

期間 五一年一〇月～五二年九月

James Reid カリフォルニア大学院生

日本の雅楽における高麗楽の分野に関する研究 指導教官 吉田助教授

期間 五一年一〇～五二年九月

Michael William Corr ワシントン大学

生物学センター所員

日本農業技術史の研究

指導教官 飯沼教授

期間 五一年六月～五二年五月

Cavalli Francesca サンパウロ大学教授

日本美術史 指導教官 林屋教授

期間 五一年六月～五二年五月

Sonja Van Nostrand ブリティッシュ・コロンビア大学院生

一休狂雲集の研究 指導教官 柳田教授

期間 五一年一月～五二年五月

荘伯和

日本歴代所蔵の中国絵画概観

指導教官 日比野教授

梅原助教

期間 五一年一〇月～五二年九月

William W. Kelly ブランデイス大学院生

現代日本における水利組織と村落構造の関係 指導教官 飯沼教授

期間 五一年一月～五二年一〇月

Antonio Forte ナポリ大学助教授

唐代思想宗教の歴史的研究

指導教官 川勝教授

期間 五一年二月～五二年一〇月

Carl Bielefeldt バークレイ大学院生

正法眼蔵 指導教官 柳田教授

期間 五一年二月～五二年一月

Peter Kornicki オックスフォード大学院生

尾崎紅葉と江戸文学

指導教官 飛鳥井助教授

期間 五一年一月～同年十二月

Joshua Fogel ハンプリア大学院生

内藤湖南の研究 指導教官 竹内教授

期間 五二年一月～同年十一月

陳恒嘉 台湾文藝作家協会

魯迅の文学をつうじてみた中国の三〇年代の文学について

指導教官 竹内教授

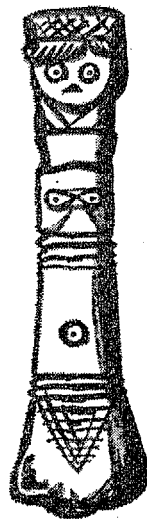
期間 五二年四月～五三年三月

書いたもの一覧

一九七六年二月

一九七七年五月

(五十音順、●印は単行本)



・会田雄次

◎表の論理・裏の論理

PHP 三月

正論

サンケイ新聞

二二・二二・三、四、五月

二月一日～五月一日

・飛鳥井雅道

◎『鵬外 その青春』

角川書店 十二月

『三遊亭円朝と近代』

歴史公論 一月

『開花』における西洋

国際交流 一二号 二月

『解説』(辻ミチ子著『町組と小学持』)

角川書店 二月

・飯沼二郎

早春のノーフォーク

農林業問題研究 一二巻三号 九月

Unit for Human Consumption

The Japan Interpreter Vol. XI, No.2 一月

◎農業を復権する——農業と工業の均衡を求めて——

(星野芳郎らと共著) 東洋経済新報社 二月

◎近世農書に学ぶ(編著) 日本放送出版協会 二月

書評・鎌田慧『逃げる民——出稼ぎ労働者——』

現代の眼 二月

『農魂の物証』の意味するもの

熊本日日新聞

二月三十一日

大塚久雄の共同体論

伝統と現代 四三号 一月

書評・戸村政博編『神社問題とキリスト教』

朝日ジャーナル 一九巻二号 一月

フェスカ『日本地産論』解題(フェスカ『日本地産論・日本農業及北海道殖民論』)

農山漁村文化協会 一月

新風土論(伊東光晴と対談) 一、二 経済セミナー 一、二月号

農協で農業は発展せず 中央公論 二月号

ローマ農業とアラブ農業(会田・梅棹編『ヨーロッパの社会と文化』)

幾千年の流れを見つめて 京大人文科学研究所 三月

戦後農業政策を振り返る 談 一二号 三月

書評・小笠原亮一『ある被差別部落にて』 教師の友 五月号

湊徹郎『農業基本政策私論』批判 農業と経済 五月号

自著を語る『近世農書に学ぶ』 農業共済新聞 五月三十一日

新風土論 1 経済評論 五月号

・上山春平

椿と日本文化

季刊アニマ七号 二月

天皇制の原形 世界 三月号

●仏教思想の通歴

明恵上人の信仰と女性

明恵上人讃仰 八号 三月

角川書店 三月

・梅原 郁

●宋王朝と新文化（『図説中国の歴史』5）

講談社 五月

・小野 和子

婚姻法貫徹運動をめぐって

東方学報 四九冊 二月

・川勝 義雄

R・A・スタン「宗教的な組織をもった道教と民間宗教との関係」（訳、『道教の総合的研究』）
国書刊行会 三月

党綱の禁・九品官人法・南朝社会（『世界歴史の基礎知識』1）
有斐閣 五月

・河野 健二

●フランス現代史

山川出版社 二月

●世界の思想家・ブルードン

平凡社 二月

地域主義への志向

経済セミナー 二月号

新しいシステムの構想

現代思想 三月号

恐慌期の政治経済学

エコノミスト臨時増刊 三月

ナショナルリズムと平和

平和研究第二号 四月

地域主義を考える

朝日新聞 五月一六日

・熊倉 功夫

近代の茶の湯

日本美術工芸 十二月

近世茶道史序説

淡交 十二月

茶人ライバル物語

同門 十二月〜三月

京都古人

別冊太陽 三月

食物の歴史

武道 五月

柳宮御道具帳（『蔵帳集成』）

五月

茶道全集解説（『茶道全集』別巻）

五月

近代教寄者の茶

芸能史研究 五四号 五月

古田織部の伝記

医事新報 五月

村田珠光

人物群像日本の歴史 五月

・阪上 孝

●ルイ・アルチュセール『科学者のための哲学講義』（共訳）

福村書店 一月

●世界の思想家・ブルードン（共訳）

平凡社 二月

現代世界の思想家・アルチュセール

東京大学新聞 五月三〇日

・佐々木 克

●戊辰戦争

中央公論社 一月

明治政権と西郷隆盛

上・下 東京新聞夕刊 四月二三、一四日

戊辰戦争と軍資金

太陽 六月号

・副島 照

帝国主義と中国関税制度——アヘン戦争より辛亥革命にいたる——

人文学報 一二月

書評・山根幸男『論集近代中国と日本』

歴史学研究 五月

・園田 英弘

学歴主義の歴史的起源（麻生誠・潮木守一編『学歴効用論』）

有斐閣 二月

・會布川 寛

別冊太陽

三月

五代北宋初期山水畫の一考察 荆浩・關同・郭忠恕・燕文貴

人文学報 四二号 十二月

『郭熙と早春圖』 東方學報 四九冊 二月
東洋史研究 三五卷四號 三月

・竹内 実

中国文芸茶話 (十・十二回) グラフィック茶道 十二、二、三月号

鳳山と江田島・二つの歴史展示館(岩波講座『日本歴史』月報20)

十二月

揺れる中国(日本綿業倶楽部 月報)

二月号

かすかな勇氣のようなもの(『中野重治全集』八巻 月報) 三月
週刊朝日 三月二十五日号

不死鳥 鄧小平

毎日新聞 四月七日

思想の運命と中国民衆

朝日ジャーナル 四月三二日号

中国の状況と平和条約

いまはしくらぶ 四月号

現代中国への視角——黄埔軍官学校のこと(上) 思想 五月号

・多田 太郎

ブルターニュ農民の生活と意識(『ヨーロッパの社会と文化』)

京大人文科学研究所 三月

・田中 淡

中国建築の歴史21、22(共訳)

建築知識 一二、一月号

中国壁画古墳の建築図と初唐建築の様式について

東方学報 四九冊 二月

・谷 泰

牧畜文化考——牧夫——牧畜家畜関係行動とそのメタファー——

レオナルドの遍歴——牧夫・渡り職人・出稼労働者——(『ヨーロッパの社会と文化』)

イタリア中部山村移牧羊の管理について (『ヨーロッパの社会と文化』)

同所 三月

植物園の思想(『世界の植物』所収)

朝日新聞社 四月

・中村 賢二 郎

スイスの山村と山地農民(『ヨーロッパの社会と文化』)

京大人文科学研究所 三月

書評・半田元夫ほか『キリスト教史 I』

日本読書新聞 四月一日

書評・金子晴勇『宗教改革の精神』菊盛英夫『ルターとドイツ精神史』

週間読書人 五月二日

・狭間 直 樹

中国再訪雜感

燎原 一号 五月

・浜田 正 美

一九七六年の歴史学界——回顧と展望——中央アジア

史学雑誌 八六編五号 五月

・林 巳奈夫

◎漢代の文物(編著)

京大人文科学研究所 十二月

・林 屋 辰三郎

元號問題私見

日本史研究 一七二 十二月

大津の今昔(山田耕三郎市長と対談) 広報おおつ 一月一日

『小足軒随聞記』(足立雅子著) 序 淡交社 二月

- 日本中世の意味 伝統と現代 四四 三月
 『水は誰のものか』(琵琶湖環境権訴訟団)序にかえて 三一書房 三月
 『新修大津市史』の出版 季報大津市史一 四月
 樋口 謹一 事件の政治学(『年報政治学—行動論以後の政治学』) 五月
 夫馬 進 明末の都市改革と杭州民変 東方学報 四九冊 二月
 古屋 哲夫 北一輝論(5) 人文学報 四三三号 三月
 第六六・六七議会展説(『帝國議会議』第一二、一二三卷) 東洋文化社 三月、四月
 前川 和也 The erin-people in Lagash of Ur III times, Revue d'Assyriologie LXX (1976), pp. 9-44.
 松井 健 民俗分類と自然観(『日本民族と黒潮文化』) 角川書店 四月
 松田 清 一八世紀フランスにおける豊旺教育(一) 人文学報 四三三号 三月
 御牧 克己 La Saṃmukhi-dhāraṇi ou "Incantation des SIX PORTES", texte attribué aux Sautrāntika (I)-Introduction-, 『印度学仏教学研究』XXV-2, 三月

- La Saṃmukhi-dhāraṇi ou "Incantation des SIX PORTES", texte attribué aux Sautrāntika (II)-Texte et Traduction-, 『日本西蔵学会々報』No.23, 三月
 柳田 聖山 禅宗私史(四六—番外三) 正法輪 一月—五月
 今月のことは 花園 一月—五月
 甲州より奥羽へ—夢窓疎石の生いたち、その二 夢窓疎石 八四号 三月
 臨濟宗(日本の仏教宗派) 仏教伝道協会編 刊行 四月
 葉落ちて根に帰る(『水上勉全集』) 月報 十一号 中央公論社 四月
 興禅護國論(増補改訂『日本大藏経』八六卷) 財団法人鈴木學術財団 四月
 夢窓と一休 山下 正男 人文 一六号
 関数概念の原初形態 横山 俊夫 現代数学 三月号
 「古日本カムサスカ」と魯鈍斉利明 人文学報 四二二号 二月
 吉田 光邦 機械 SD 二月
 ◎日本の伝統工芸 京都一(編著) 講談社 二月
 有機体の造形 インテリア 一月
 光と闇の世界 劇場 一月

序にかえて『上ル下ル京の町』所収)

リスボン地震と思想史

プリント小史

布を刺す(対談)

●南島(編著)(江戸時代図誌)

加賀友禅図録

時間論

クラフト伝統(対談)

手づくりへの郷愁(『日本の手づくり工芸』収)

現代の手仕事

友禅小考(『友禅』収)

イスラムのタイル(対談)

ふるさとの工芸(『ふるさとへの旅』三、四、五)

鉄と花器の歴史

東西文様散策

工芸時評

吉川 忠 夫

党綱と学問—とくに何休の場合—

東洋史研究 三五卷三号 二月

島夷と索虜のあいだ(『世界の歴史』4 月報)

講談社 一月

太陽 二月

流行通信 三月

染織と生活 三月

筑摩書房 三月

きものと装い 三月

ロアジール 三月

ふあっしょん京都 四月

世界画報 四月

五月

五月

装飾タイル研究 一号 五月

五月

華道 一月、五月

カラーデザイン 二月、五月

染織マンスリー 二月、五月

▼最近読んで感銘を受けた本(所員へのアンケート)

柳田聖山 吉川幸次郎、三浦国雄『朱子集』(『中国文明選』

3)(朝日新聞社)

上山春平 『仏教思想の遍歴』(角川書店)

福永光司他 『最澄・空海』(『日本の名著』3)

(中央公論社)

河野健二 宮崎市定『中国史』上(岩波全書)

佐々木克 山辺健太郎『社会主義運動半生記』(岩波新書)

金寿達『わがアリランの歌』(中公新書)

飯沼二郎 鎌田慧『逃げる民・出稼ぎ労働者』(日本評論社)

金寿達『わがアリランの歌』(中公新書)

小笠原亮一『ある被差別部落にて』(日本基督教団出版局)

外国人研修員 (統)

郭麗英

般若思想の研究

期間 五二年五月、五三年四月

Hell Liliane (国費外国人留学生)

日本人の精神的特徴の社会心理的考察

指導教官 柳田教授

期間 五一年一〇月、五二年九月

指導教官 会田教授